

下 I イ 2 フ オ X - エ 3 2.

木 X オ ス X - エ ス と 体内 pH

木 X オ ス X - エ ス (恒常在) は、米国のキヤノニという生理学者によりとらえられ、以後各生理学者が、それをもとにいろいろ研究をしてあります。木 X オ とは、ほぼ一定、ス X - エ ス は同一の という意味で人体は常に一定の数値を保って体を守っています。

体温、呼吸数、脈搏、血糖量、塩分濃度、血圧、皆数値が一定、とあります。酪、アミノ酸の自來とこの pH (ペーハー) も 7.35 とあります、とあります。というのは、体内はひとつの化学工場と考えられるからで、化学反応は常に一定の状態に保つために 体内の は体内条件が同じでなければならぬからです。

もし体液 (血液やリンパ液など) の pH に変動があると、今まで働いていた酵素の働きがたぶり、体調も悪化します。それは、体の

中にはいろいろな種子の2-7が存在し、
酸性的状態ではゆるいもの、アルカリ性
の状態ではゆるいものが存在し、アルカリ性
の状態ではゆるい2-7の子は、健康を傷つゝに大
へく役に立つ、このこと。ですから体内に
酸性成分がたまると、7.35の数値から酸性
側に動向することは、健康によい事では、な
いこと。 (もちろんアルカリ性もゆるいことには
な

たが体内は恒常性があるため、通常pH7.35
に保たれていて、体内に酸性成分がたまると
すると、常にそのpHを保ち、その子の心臓
のpH-恒常性があり、pHは変動しにくいこと。
たがし酸性成分が増え、2-7の反応に微
妙に変化がおきます。女性の生理時の体調の
みだれなどもこの例に属します。

ところがこの一定の数値がくたれた時は
り、それは疾病ということ。

身近な例では、かぜをひくと熱をもち、
温度の上昇と化学反応は促進し、恒常性が
おとすわけ。

PH たついは、手がりに測定あつてこた
てりせんが、PH 7.1 以下にちつと急激を失
いするし、PH 7.6 以上であつてチーホクをあこ
しする。又ガレ細胞を測定あつて ~~PH 6.8~~
ふしちりしていき方。

て休病者にするやうなば 大丈夫と思へ
すが、体内を PH 7.35 以下、^{カハ} 2 とは、チーホク
とちつとあつて、手を切つて、^{PH} 動かして、酸
性成分がたまるときする。つまり先づチーホク
上毎日毎日、酸性成分を排出していきつて、
その代りに毎日酸性成分を排泄していきする。
汗も酸も皆酸性です。

一定の酸価 ~~PH 7.35~~ を得たために、自
律神経やホムエ、²⁻⁷、膜の透過性を
どのよりちつとていひわけてあつて、自分の意
志でこのホムエにちつとあつて、
いと恒常性にも限界があり、発病するりする。
つまり自分自身のため、外から恒常性の
手助けをすることである。

過勞、睡眠不足、酸素不足(酸素が足りない)

たり、夕べ2の煙の平均値(〜) 酸塩食品
(炭水化物、動物性脂肪など) 過剰摂取、便
秘に注意して酸塩成分をためこまないこと、
積極的に予備のエネルギーを摂取することが大
切です。現実には、その予備のエネル
ギーとして体内に貯蔵しておくことで、しそ
酸などを蓄積してエネルギーと化すべく有効な
エネルギーです。又、エネルギーの多いもの
良質の蛋白質(両性化合物である) 酸塩とし
てもエネルギーと化してゆく) も同じ働きがあ
ります。